シリーズ・病院

平塚共済病院

西沢春彦

平成15年４月より、秋山朋子先生の後任で参りました、西沢春彦と申します。このたび当院の紹介をするようにとのご指示を頂きましたので、拙い文章で誠に恐縮ですが暫時おつきあい下さいますよう宜しくお願い申し上げます。尚、あまり堅苦しくならず、ユーモアも交えてとのご依頼でありますので、なるべくご期待に沿う様鋭意努力いたします。

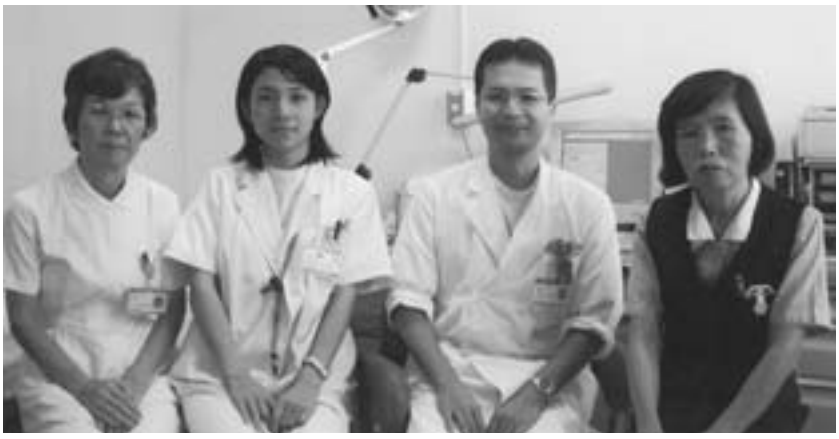
まず、当院につきましては沿革など殆ど全く承知しておりませんでしたので、慌ててホームページを開いてみました。院長の金山正明先生の顔写真がまず目につきます。大変温厚なお人柄ですが、それがお顔にもそのまま表れておられます。恵比寿顔とは正にこのことかと、廊下ですれ違う度に感じます。またお体つきも恰幅が良く、大黒様のようです。七福神の内、二神までも体現しておられる稀有なこの先生のご統率の下、当院の前途は洋々たるものであると、細木数子ならぬ私とても断ぜざるを得ないのでございます。

当院の沿革云々につきましては、大正８年に設立されたとありますが、同年が西暦何年なのか皆目わかりませんし皆様のご関心も極めて薄いかと拝察いたします。かくなる上は、断腸の思いをもって全て割愛させて頂きたいと存じます。

当科のご紹介に移ります。当科医師は、私と福永有希先生の２人です。また、毎月第３木曜は内山皮フ科院長内山光明先生にご診察を頂いております。内山先生につきましては改めて申し上げるまでもございませんが、横浜市立大学医学部講師、神奈川県立がんセンター皮膚科部長をご歴任ののち、内山皮フ科院長としてご活躍中です。因みに同院は、京浜急行杉田駅改札出て左、少し階段を上り右へ、すぐ左奥にございます。内山先生には、この誌面を拝借しまして厚く御礼申し上げます。

外来スタッフは、看護師１名、事務員１名と小所帯です。看護師１名も皮膚科専属ではなく、３～４人が交互に勤務しております。その内で、皮膚科がメインで仕事をされているのが、木崎さんです。皮膚科での勤務が主になってから４～５年とのことですが、当院での職歴は長く、ベテランでいらっしゃいます。物腰は穏やかですが、仕事はてきぱきとこなされ大変信頼の厚い方です。

事務員の石原さんは平成２年から当科におられますので、宮本先生、山川先生、秋山先生の御三方ともご存知です。当院には実に昭和51年からという大ベテランです。仕事もしっかりされていることは申すまでもありませんが、素晴らしいのは、患者さんへの受け答えが非常に丁寧なことです。外来で患者さんを長くお待たせしてしまい、待ちかねた患者さんが、「あと、どの位（の待ち時間）ですか？」と受付に声を掛けられることがありますが、誠意を持って対応されていますので、患者さんもご気分を害されることは殆ど無いのではと存じま



外来スタッフと。左より木崎看護士、福永医師、西沢、石原事務員
（平成15年９月）

す。誠に有難いことでございます。

それでは、大変長らくお待たせをいたしました、福永有希先生のご紹介をいたします。平成11年卒で、２年間の研修後皮膚科に入局。大学で１年間勤務ののち、平成14年４月より当院におられます。その端麗なる容姿からは深窓の令嬢という印象を強く受けますが、おしとやかで、品があるのみならず、一方で大変活動的でもあります。マリンスポーツとゴルフが好きで、しかもかなりの力量と伺っております。文武両道に秀でた福永先生は現代女性の理想と言っても決して過言ではないと存じます。もちろん患者さんや病棟の看護師さんの受けも良く、日々の業務がどうにか円滑に進んでいるのも福永先生の力に拠るところが大きく、感謝しております。（卒業年を明らかにしますと、年齢も分かってしまいます。女性の年齢に関して言及することが失礼だとは重々理解しておるつもりですが、卒年を省略しては全き紹介文とは呼べません。福永先生ごめんなさい。）

最後に簡単に自己紹介をさせて頂き駄文を終わりたいと存じます。私は平成７年卒で平成９年横浜市大皮膚科入局後、大学、横須賀共済病院一山先生、横浜栄共済病院杉山先生のご指導を受けました。４歳と１歳の２人の息子がおります。横浜の上大岡に住んでおります。運動は不得手で椎間板ヘルニアも持っておりますので、時折散歩する他は体を動かすことがまずありません。運動不足と不摂生がたたり、体脂肪率の上昇を認めております。仕事のことを別にしますと体重、体脂肪率の低下を如何に達成していくかが課題と考えております。

今後ともご指導の程宜しくお願い申し上げます。

新任のご挨拶

伊東慶悟
厚木市立病院

平成15年１月より太田真由美先生の後任として、県立厚木病院皮膚科に赴任致しました。それまでは慈恵医大皮膚科に勤務しており、今回１人出張の形で派遣されました。

私は慈恵医大を平成５年に卒業し、卒後すぐに病理学教室に入局しました。一般病理医として組織診断の仕事をしている時は皮膚病理が大の苦手でした。もともと皮膚科は皮疹を中心に多くの病名がつけられており、皮疹を見ない病理医にとってはなかなかなじめない分野です。それでいて検体数としてはコンスタントに多いので日々悩まされていました。皮膚科医の臨床診断をもとに教科書で確認するという心もとない作業を繰り返していましたが、なにしろ実際の皮疹を見ていないわけですから、何度やっても頭に残らず興味も湧きませんでした。そのため的確な臨床診断をつけられる皮膚科医は非常に頼りになり、尊敬に値するものでした。

また臨床研修を受けていませんでしたので、病理解剖をしながら臨床医の説明を聞いていても途中からはどうしてもついていけないところがありました。コンプレックスをかかえながら６年が過ぎ、病理専門医の資格が取れた時点で一念発起して再び初期臨床研修医からやり直しました。自分より６年下の人たちと一緒に研修を受けている時はつらい事の方が多かったように思いますが、今では懐かしい思い出となっています。

そのようなわけで回り道をしていた分、臨床経験が少ないのは否めませんが、現在は臨床の場で皮疹を見つつ、皮膚病理も見られる医師を目指して日々努力しております。まだ病理医から頼られる皮膚科医の領域には達しておりません。

ご存知のように当院は平成15年４月１日より県立から厚木市立病院へ変わりました。病院の事務関係の方はだいぶ入れ替わりましたが、医師はそのまま

で特に変化はありません。皮膚科も月曜から金曜まで医師は私１人で診療をおこなっています。午前中は一般外来で、午後は外来手術と学校に通う学生さんのための診察をしています。近隣の開業医の先生方からのご紹介も頂いており、手に負えない場合は慈恵医大病院への紹介もしております。

現在私は東京の羽田に住んでおり、通勤は羽田空港から本厚木駅までの直行バスを利用しています。片道1,500円で約１時間で着きます。毎日飛行機に乗る人たちの中にまぎれて、バスの中で寝ながら快適に通勤しています。

１人医長としては風邪をひいても休むわけにはいかず、なにより健康には気をつけなければならないので、多少値は張りますが電車より楽なバスを利用しています。

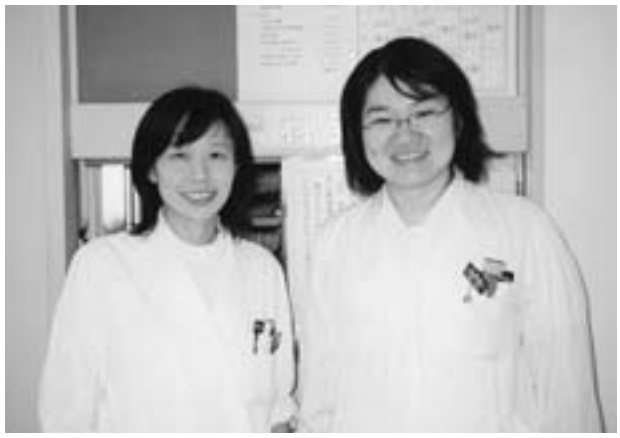
最後になりましたが、これからも厚木市立病院ともどもよろしくお願い致します。

横浜栄共済病院

山川有子

横浜栄共済病院は、昭和14年大船海軍共済組合病院として発足しました。戦後は国家公務員共済組合連合会が継承して大船共済病院となり、昭和61年の戸塚区から栄区への分区に伴い横浜栄共済病院と改称して現在に至っております。横浜市栄区と鎌倉市の境界に位置し、地域の基幹病院としての役割を担ってきました。当院はJR京浜東北線（根岸線）本郷台駅から徒歩６分の病床数455床、18科の専門科を備えた総合病院です。春には院内の大きな桜の木が満開となり、秋には病院のまわりのいちょう並木がきれいに紅葉（いろ）づきます。

歴代の当院皮膚科に勤められた先生は、林正幸先生、毛利忍先生、そして杉山朝美先生と、経験と実力とそして優しさを持ち合わせた優秀な先生方ばかりです。平成15年６月まで勤められた杉山朝美先生は、その豊富な経験と、いつまでも変わらない愛くるしい笑顔で、12年余り当院で診療され、患者さんから絶大なる信頼を受けていらっしゃいました。曲がった腰を伸ばしながら通っていらっしゃるおじいさん、何度も今までのことを説明してくださるおばあさん、杉山先生に切って貰ったんだとおっしゃる患者さん、ずっと通い続けているお子さん。老若男女、杉山先生を慕って通っていらっしゃっていたことがひしひしと伝わってきます。また、患者さんばかりでなく、近隣の諸先生方からもたいへん信頼を頂戴していたことに感嘆しております。これは当院と近隣の先生方との病診連携が非常に上手くできている賜物でしょう。



浅古佳子先生（右）と

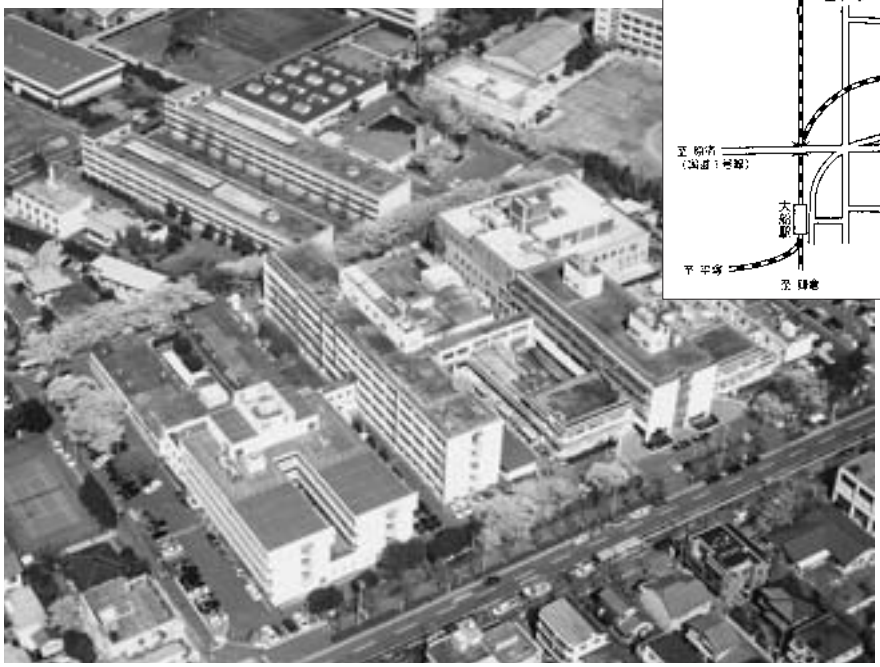
このように歴史ある病院で、しかも優れた先生方の後釜として、私が平成15年７月より診療を引き継がせて頂いております。今まで、横浜市立大学医学部病院、横浜市立市民病院、平塚共済病院、そして横浜市立大学医学部附属市民総合医療センターなどで診療して参りました。各病院で諸先生方に、皮膚科診療だけでなく、医師たるものは何ぞやまで教えて頂きました。

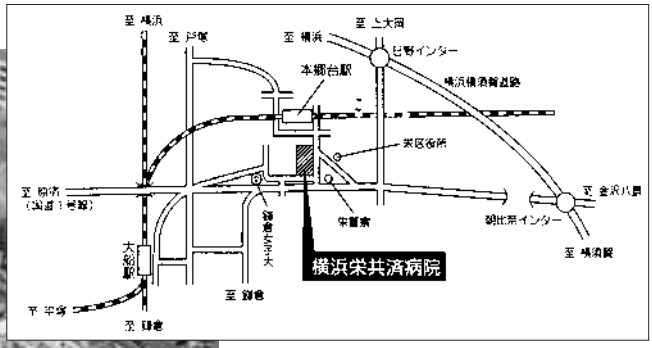
現在私は、以前にも大学で御一緒でした浅古佳子先生と２人で、和気藹々と診療しております。浅古先生は医師としてのセンスに長け、要領を得た技術と優しい心を持ち合わせているばかりでなく、トンチが利いて人気者です。その他、非常にfoot work

の軽い働き者のベテラン看護士２人、記憶力と気のつき方では右に出る人はいない明るい受付嬢１人に、いろいろと助けて頂いております。外来の中はいつも楽しく、明るく、これ以上の職場はなかなかないだろうと自負しております。

ただ、病院の造りは以前のままのため、外来スペースに限りがあって、少々声が大きい（しかも透る声らしい）私は、「先生の話は外の患者さんにまで筒抜けだよ」と患者さんに窘められることがあります。あわてて声を小さくしても、次の患者さんの耳でも遠ければ、すぐに大声に戻ってしまう……我ながら困った点です。

これからも今まで通り、患者さんから慕われる病院・皮膚科でありたいと切望し、いつも笑顔で診療したいと考えております。今後とも諸先生方のご指導・ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。





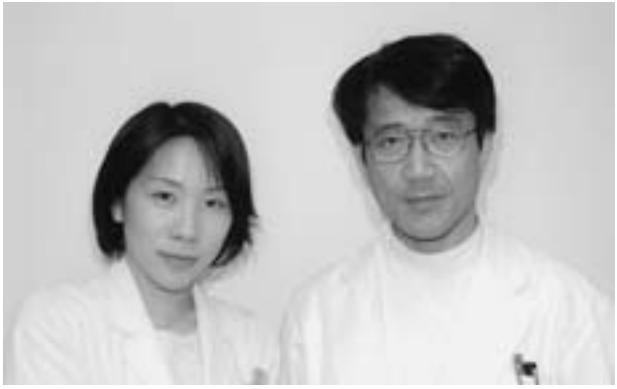
藤沢市民病院

小松　平

藤沢市民病院は1971年10月に開院しました。場所は、藤沢駅から小田急江ノ島線でひとつ目の藤沢本町駅から徒歩で10分たらずのところにあります。

現在の病床数は、一般病床500床、感染症病床６床となっています。

当院は、開院以来、地域の医療機関との連携と機能分担により、地域の基幹病院として運営されています。2000年の４月には、医療法に基づく「地域医療支援病院」として全国で25番目、神奈川県下で初の承認を得ております。その他の特徴としては、当



山口由衣先生（左）と私、小松

院は原則として紹介･予約制を基本としていることもあげられます。

さて、私は2003年の４月に当院に赴任して、現在約半年が過ぎたところです。当院の皮膚科のスタッフは２名ですが、医長と修練医（研修医終了後数年までの若手医師が対象で、現在は山口由衣先生）各１名となっております。ここの皮膚科の患者の特徴としましては、先に述べたとおり、紹介を原則としていてしかも病院が地域の基幹病院であることから、いわゆるcommon skin diseaseが少なく、逆に皮膚科疾患の中では重い方、例えば悪性腫瘍や膠原病、ベーチェット病、水疱症などの患者が多いことがあげられます。そのほか、急患や他科からの急併診依頼もかなり多数あります。ですので、患者数のわりに（純外来患者数で90～100人）診療に時間がかかり、かなり忙しい病院という印象をもっています。また、皮膚科の定床数は４ですが、実際は常時ほぼその倍の数の患者が入院しています。その内訳は、帯状疱疹、蜂窩織炎、じんましん、褥瘡、糖尿病壊疽、手術患者などが多くなっています。

かたくるしい（？）紹介は以上にして、次に現時点での率直な感想を書きたいと思います。

当院は、皮膚科は先に述べたとおり医師の定数は２人ですが、ハッキリ言って最低３人は欲しいところです。この規模で、また藤沢市およびその周辺の重い患者、治りにくい患者の大半が集まってきますので、医師２人では毎日が“戦場”状態といっても過言ではありません。外来、手術、病棟と毎日フル回転で、その合間には急患もけっこう入ります。特に夏場は、朝から晩まで昼食の15分以外、１分も休むことなく診療していたこともたびたびでした。ちなみに私は、2003年３月まで、横浜市のKW病院という、比較的小規模で落ち着いた雰囲気の病院に勤務しておりましたので、当院に赴任した頃はそのギャップの大きさに毎日が驚きの連続でした。

また、当院の特色（？）のひとつとして、院内の各部門の“独立性”の高さがあげられるかもしれません。医師が、“ここをこういうふうにして欲しい”と頼んでも、看護部、事務部門など、組織の力がとても強く、なかなかすんなりとは行かないことが多いのです。

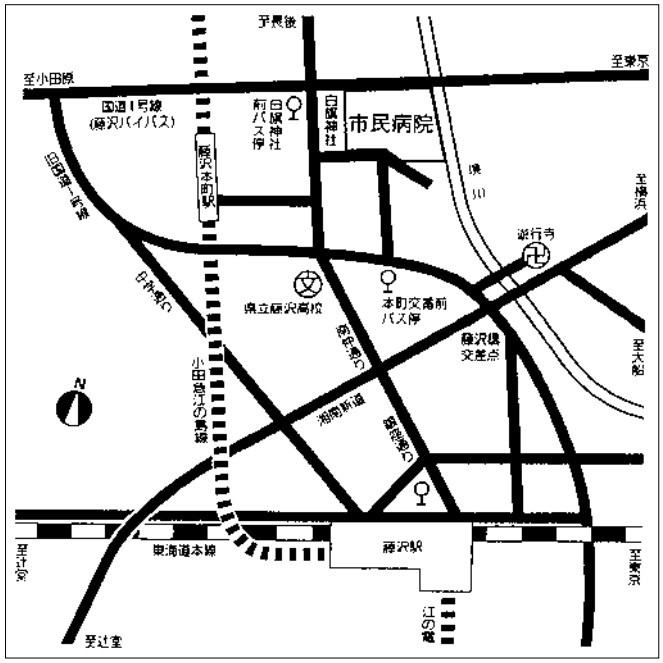
さらに、患者の方々も、湘南の高級住宅地に住む方もいらっしゃるためか、“ハイソ”な雰囲気の方もいらっしゃれば、“発言力”や“権利意識”の高い方も少なくなく、当初はずいぶんとまどいました。

少しは良いことも書かなければいけませんね。

当院の良い点といえば、まず症例が豊富なことがあげられそうです。腫瘍はもちろんですが、水疱症、乾癬の重い人、血管炎等、かなりバラエティーに富んでいますので、勉強にはなると思います。“良きオーベン”に恵まれれば（？）、発表や論文にする機会は多々あると思います。

その反面、手荒れや水虫、いぼ、にきびなどの患者が少なく、私の嫌いな“ミズイボ取り”は、この半年で１回もやらずにすんでいます。

さて、書きたいことを書いてきました。けっこうキツイところではありますが、これからは少しでも居心地が良くなるようにしながら、地域の医療のために頑張ってやっていきたいと思っております。そのためには、周辺の医療機関の先生方、および横浜市大の先生方をはじめとする皆様のご協力、ご支援が不可欠と思います。なにとぞよろしくお願い申し上げます。



日本医科大学付属第二病院

青木見佳子

多摩川の河畔にあって、渋谷より15分、横浜より20分と交通至便なところに位置する日本医科大学付属第二病院は、診療科16科、病床数372床の地域に根ざした大学病院です。私は平成15年７月より、竹崎伸一郎部長の後任として着任し、現在４ヵ月が過ぎたところです。永年通い慣れた千駄木の付属病院を離れましたが、私にとっては予科の（この言葉で歳がばれます）２年間を過ごし、丸子祭やテニスに熱中していた懐かしい丸子に帰って来たという感があります。

日本医大第二病院皮膚科のスタッフは、私を含め現在５名です。千駄木の付属病院皮膚科と一体として人事が決められますので、時々スタッフの交代はありますが、現在は高田香織医局長（第二病院勤務２年で一番古株）、山形健治助手、富山幹助手、川久保恵医員といずれも大変働き者の医局員とフットワークの良い優秀な看護師さん、よく気が付く整理上手の秘書さんに恵まれています。

この４ヵ月間は外来が１日100名前後、入院は４～８名くらいで推移していますが、他の医療機関の休診が多い土曜日には140～150名の外来患者さんが受診されることもあり、全員フル回転で診療しても患者さんをお待たせする時間が長くなっています。入院も数は決して多いとは言えませんが、ここ４ヵ月の間にも急性感染症、悪性腫瘍、膠原病、薬疹、難治性皮膚潰瘍等、様々な疾患を治療させて頂くことができました。

現在、形成外科と泌尿器科の部長は２人とも私の同級生なので、手術や症例で困ったときなど気軽にコンサルトができ、助かっています。また、10月からは第二病院に救命救急部が開設され、（こちらも医局長は同級生なのですが、子育てをしながら、時には１週間に５日当直してしまう美人のスーパーウーマンです）皮膚科領域では重症薬疹、ガス壊疽などの重症感染症、重症熱傷などにも対応が可能となりました。今後はこうしたこぢんまりとした病院ならではの各科間の協力態勢を活かし、日常的皮膚疾患はもちろん、入院、手術が必要な患者さんも広く受け入れて行きたいと考えております。

（前列左から）山形助手、青木、高田医局長。
（後列左から）吉田看護師、川久保医員、富山助手

日本医大の卒業生でありながら不埒なことに、今回、この原稿を書かせて頂くにあたって、初めて日本医大第二病院の記念誌等を読み、初めて第二病院や第二病院皮膚科の歴史を知った次第です。当院は昭和12年６月、丸子病院として開院しました。皮膚科は昭和13年１月より開設され、初代皮膚科泌尿器科医長は丸山千里名誉教授が着任されました。しかし、その後第二次世界大戦が始まり、終戦４ヵ月前の昭和20年４月15日夜半のＢ29による空襲は、東京西南部一帯から新丸子方面に集中し、第二病院は予科の一部を残して一夜にして灰燼に帰しました。患者、職員ともに１名の犠牲者もなかったそうですが、焼け残った近隣の国民学校を借りての診療から始まった戦後の復興は、大変な道のりでした。

以前に発行された、このシリーズ「病院」を拝見すると、新しくきれいな病院が多く羨ましい限りですが、現在、第二病院で部長室、医局などの管理棟に使われている建物は、昭和40年に竣工した旧「新病棟」、現在の病棟は昭和52年、外来棟は昭和63年に増築された建物です。皮膚科は戦後、宗像醇名誉教授、そして私の恩師である本田光芳名誉教授、服部怜美先生などが医長、部長を務められ、現在までにすでに65年の歴史がある診療科です。

この長い貴重な歴史を踏まえ、さらに新しい技術や治療を取り入れた視点から、地域の中でのよりよい病診連携、病病連携に向けて努力して行きたいと思います。今後とも御指導、御鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

東海大学医学部付属病院

松山　孝

1999年より、先代大城戸宗男名誉教授の退官に伴い、小澤明教授体制が始まり、皮膚科学部門（2001年より皮膚科学教室から感覚学系皮膚科学部門に、さらに現在は専門診療学系皮膚科と呼称が変更）は新しくスタートしています。それに伴い何か新しいことをということで、東海皮膚研修セミナー、病診連携の会など、旧体制では行わなかったことも始めています。

東海皮膚研修セミナーは、月に２回程度の割合で他大学、他施設の講師をお呼びし専門医を持たない臨床助手、研修医向けに講演していただくものです。会もすでに60回を超え、様々なテーマについて勉強させていただきました。開催日は不定期ですが、もし神奈川の先生方で聴講御希望の先生がおられたら連絡いただければ御案内させていただきます。

病診連携の会は、年に１回、その年度に紹介していただいた症例の中で学会報告を行わなかったが興味のあったものの症例報告を行っています。１年間当大学に紹介していただいた先生方には、自動的に開催日決定後、御案内させていただいております。

日常の診療は乾癬外来、アトピー外来をはじめ、特殊外来を増やし、予約診療の数を増やし、診療の待ち時間の短縮と診療内容を充実させるようにしました。また付属八王子病院、付属大磯病院、関連病院で池上総合病院、海老名総合病院と守るべき城の数も増えました。

スタッフは現在、小澤教授、太田幸則講師、梅澤慶紀講師、飯塚万利子講師、岩下賢一講師、私の５人の講師と塗木裕子助手、平林香助手、田宮紫穂助手と臨床助手（卒後３～５年）の近藤章生、野澤雅樹、八木葉子、赤坂江美子、水谷公彦、山本向三６名と大学院生、馬渕智生、生駒憲広、品川はる美の３名のメンバーで大学病院、関連病院を守っています。

大学病院の施設についてですが、当時東洋一の規模、設備を有するということで開院しましたが、すでに20数年たち、老朽化も目立ち、また新たな設備についても対応できなくなりました。すでに日皮会地方会で皆様にご不便をおかけし気づいた方も多いでしょうが、2006年１月の完成に向け、新病院の工事が始まっています（完成図添付）。

建物はすでにその外観、内部の診察室、病棟の図面は出来上がっております。診療室は待合室を含め現在より広くなり、また、軟膏処置前にもしくはPUVA-bath用にシャワールーム、浴室を病棟のみでなく外来にも設置予定です。

新しい病院の診療には、夢も膨らみますが、包括医療など宿題も多いのが現状です。前述のように決して多くないメンバーで日夜今後もがんばっていきたいと思います。神奈川皮膚科医会の皆様方、県内の大学病院の先生方、症例・疾患についてのみならず、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

新病院の完成予想図